

井野瀬久美惠著

## 『大英帝国という経験』

興亡の世界史 第一六巻』

金澤周作

大きく言って、イギリス史研究は国内史と帝国史に分かれている、ということになっている。経済、社会、文化、政治、国制、ジェンダーなど、いずれのテーマも、この二つの領域に棲み分けているかのようだ。帝国を無視する国内史も、国内を無視する帝国史もありえはしないが、研究者は総じてどちらかに陣取り、互いに知見をぶつけ合い、そのようにしてダイナミズムとしての「イギリス史」は構築されている。さて、さまざまなレベルの間と時間と人間関係と言説とが織り合わさって浮かび上がる模様としての「イギリス史」は、「世界史」という、つねに微修正され、その意味で、図柄が明滅している大タペストリのなかに、織り込まれてもいる。それゆえ、対象が限られる学術書は別として、すべての読者にとって有益なイギリスに関する歴史書には、有名無名の個人について、その人生の機微、生活の哀歓、ささやかな成功や失敗、無数の行動や言動の詳細を描き、これらを規定する構造を説明するだけでなく、世界史のうねりを垣間見せる流れ

が描かれていなければならないだろう。

まず確認しておくべきは、本評で取り上げる井野瀬氏の「大英帝国という経験」は、まさにそのような歴史書であるということである。帝国史という立ち位置から、これまでの自身の研究と内外の重要な研究成果とを手際よく総合し、生身の人間の息遣いが聞こえてくるような印象的なエピソードを随所に配して、二五〇年に及ぶ歴史を一時も飽きさせずに読ませてくれる。「興亡の世界史」シリーズにふさわしい堂々たる内容だ。

この本の構成は、簡単に言うと次のようになっていて、アメリカ独立革命戦争を契機として、イギリス帝国史の新しい歴史がスタートし、インドに重心を移した新帝国は一九世紀に未曾有の拡大を見せるが、二〇世紀の後半には失われる。この「興亡」の中に生きた人々が、時代によって、問題<sup>アジェンダ</sup>によって、階級によって、ジェンダーによって、帝国の何をどのように「経験」したかを積みかけるように叙述するのだ。したがって、帝国史で重視されがちな、なぜ帝国は拡大（衰亡）したのか、といった論点は半ば棚上げされ、舞台として前提されている。それよりも、「帝国」に否応なく浸潤されざるを得なかったイギリスの人々が、その舞台をどう感じ、そこでどう振舞ったかの分析に、本書の主眼と長所がある。

本評では、まず前半で、一読者としての視点で本書の内容を紹介し、有益な歴史書たる所以を説明する。後半では、今度は国内に軸足を置くイギリス史研究者としての立場から、井野瀬氏の「帝国の物語」が胚胎するいくつかの問題点を指摘したい。そして最後に、国内史と帝国史の協力が生みだすイギリス史像を展望

したい。

序章にあたる「はじめに」では、ミレイの絵画を枕にして、大西洋中心に作られた重商主義的な「プロテスタントの帝国」（第一次帝国）が、アメリカ喪失をきっかけに、インド中心の自由貿易に立脚する「慈悲深い博愛主義の帝国」（第二次帝国）へと変質し、二〇世紀後半に失われる「見取り図」を示し、「アメリカの喪失」事件以来、イギリスと帝国がどのように再編され続けたのかという本書を貫く課題設定をする。あわせて、帝国の政治的・軍事的・経済的実態とは別の、想像やイメージの問題としての面を重視することを宣言し、書名に「経験」を含む意味が明らかにされている。

第一章「アメリカ喪失」は、名高いギボンの『ローマ帝国衰亡史』が、アメリカ独立革命戦争と時を同じくして、しかもイギリス帝国の運命と重ね合わせて書かれたというエピソードから始まる。長引くフランスなどとの戦いに勝ち抜くため、イギリスは財政軍事国家化し、人々に間接税の形で重税を強い、公債に頼って国家財政を慢性的な赤字超過にした。アメリカ独立の遠因もまた、七年戦争にかかった戦費を、一三植民地から徴収しようとしたことにあった。ジョージ三世の政府は、暴政と乱費をこととする「腐敗」体制だと糾弾された。国内では急進主義者たちによってアメリカ支持と議会改革が叫ばれ、他方、一七世紀以来、物心両面からイギリス人化していった植民地人は、反発してフランスと結び、イギリスの宗主権を否認して、ついには「アメリカ人」になる道を選んだ。同じイギリス人と信じて消極的な直接統治を続けたつげを払わされたと感じたイギリスは、これを教訓とし、以

後は、いわば積極的な間接統治へと舵を切ることになる。

第二章「連合王国と帝国再編」は、アメリカ喪失後、アイデンティティ・クライシスに苦しむイギリスの姿を描く。治癒策として期待されたのは、モラルと機構の刷新、リフォームだ。一九世紀前半までのイギリスは、道德改善運動、奴隷貿易・奴隷制度廃止運動、そして議会や特権会社の改革を求める熱気に沸騰する。東インド会社への注目は、帝国のインドへのシフトを物語る。次に、氏は、フローラ・マクドナルドとジェラルド・オハラの数奇な生涯を導きの糸にして、帝国に半ば進んで吸収され同化するスコットランドと、暴力的に吸収され、反発を強め、共和主義伝統を育み後に独立するアイルランドの近代史を、対照的かつコンパクトに描き出している。

第三章「移民たちの帝国」では、アメリカ喪失後、イギリス側に加担した白人・黒人のロイヤリストたちをイギリスがノヴァ・スコシアやシエラレオネに移民として受け入れた事実（悪のイギリスと善のアメリカという構図を逆転させるものでもある）から説き起こし、帝国が、イギリス本土に住む人々に独特の選択肢を与えていたことを語っている。植民地は、国内で余った人間の棄民先でもあった。一九世紀に入ってから、工業化と都市化、あるいは劇的な不況や飢饉に伴う人口圧が、主に都市民を、一世紀の間に一〇〇〇〜二〇〇〇万の規模で、オーストラリアやニュージランド、そして、いまや外国となったアメリカへと押し出した。一九世紀末から二〇世紀初頭にかけては、「帝国の長女」カナダへ、積極的に移民が送り込まれた。ただ、この頃カナダは独自性を強め、イギリスの期待とは異なる国づくりを始め、東欧や

アジアの移民を呼び込んでゆくのであった。来るべき帝国の落日を予兆する出来事である。

第四章「奴隷を解放する帝国」では、一七世紀後半から一八世紀前半にかけて活躍したブリストルの商人エドワード・コルストンが、奴隷貿易を独占した王立アフリカ会社の役員であったにもかかわらず、一九世紀以降その側面は忘却され、ブリストルでは主に「博愛主義者」として記憶されてきたことを最初に確認する。奴隷商人としての顔が忘れられた原因を、氏はイギリスの「慈悲深い帝国」への転換に見る。啓蒙思想、収益の低下、クエイカーらの宗教的熱情、そして、積荷の奴隷を海上に投棄して保険金を詐取しようとしたゾング号事件などが重なって、一八世紀末からウィルバーフォースやクラークソンらの主導で奴隷貿易廃止運動が盛り上がり、女性を中心とする不買運動も手伝って、一八〇七年には奴隷貿易が、そして三三年には奴隷制度が廃止された。しかし、この解放者というポジティブな自己像は、イギリスが帝国を失い、マルチエスニック化の度合いを強めた二〇世紀末に強烈な異議申し立てを受ける。テレビ番組、展示企画などにより奴隷貿易の過去が蘇られ、ブリストルはこの記憶に直面することを余儀なくされる。一八世紀後半にブリストルの地位を奪い奴隷貿易の拠点となったリヴァプールにも、二〇〇七年に国際奴隷制博物館がオープンした。その前年に公開された映画「アメージング・グレイス」のような「解放」の功績を強調する路線や、最近、奴隷船で働いた船員たちの複雑な実態について問い直しが進んでいる事実にも触れて欲しいとは思ったが、第十章と対をなし、「記憶の歴史学」の見事な手本にもなっている。本書中の白眉だ

と思う。

第五章「モノの帝国」は、コーヒーハウスが軒を連ねていたイギリスが、一九世紀後半に紅茶の国へと変貌していった過程を、とくにジェンダーの視点から論じている。インド支配の強化と紅茶の国民飲料化がリンクしていることも指摘している。続いて、ロンドン万博の象徴、水晶宮の設計に際し、グローバルに展開していた植物採取・交流のネットワークのもたらした巨大な睡蓮の構造がいかにされたエピソードが紹介される。その水晶宮では無数のモノが圧倒的な規模で展示され、この方式は、やがて百貨店に応用された。人々の消費生活は大きな変貌を遂げ、販売する側も、帝国のイメージを利用したパッケージ戦略をすすめる、購買欲の喚起につとめた。「路地裏の大英帝国」を生んだイギリス都市生活史研究会から、氏がどれほど多く学んだかをよく示す内容だ。

第六章「女王陛下の帝国」は、一八世紀後半以来、王室および政治家の私生活が公衆にさらされるようになってきた時代に即位した女性君主ヴィクトリアの現実と表象を描く。ミドルクラスの理想を体現する家庭的で貞淑な妻、やさしい母、そしてアルバート死後は、未亡人としてのイメージを、つぎつぎに身にまとい、帝国の母として人々の崇敬を集め、現代まで続く「王室の女性化」を決定づけた。つぎに、氏は、この女王に捧げられた黒人少女サラの物語を脱構築してみせる。野蛮なダホメー王国から「救出」され、女王の庇護の下、教育を受け、文明化の恩恵に浴した後、アフリカへ遣わされた、という当時流通した帝国版の物語は、「慈悲深い帝国」という新しいアイデンティティを強化する。しかし、実際には、彼女は、かつて「奴隷貿易の帝国」イギリスの

貿易相手国だったダホメーからの、奴隷としての「贈り物」であって、結局サラは帝国（ヴィクトリア女王）の都合に翻弄される人生を強いられた。その意味で、帝国のアイデンティティに刺さる棘のような存在だったのだという。氏の既発表の論文および著書のエッセンスが凝縮され、部分的には乗り越えている章だ。

第七章「帝国は楽し」は、博物館、旅行、エンターテイメントの三娯楽を扱う。最初に、大英博物館の沿革と、そこを中心に盛り上がった一九世紀以降のエジプト・ブームを、当時の帝国観とからめて論じる。つぎに、旅行の大衆化を推し進めてトラベルからツーリズムへの転換を果たしたクック父子に焦点が当てられている。ハード、ソフト両面での革新が安価なグローバル・ツーリズムを成立させ、当初あった道徳改良的側面は次第にむきだしし商業主義へと姿をかえた。クック社はゴードン將軍の救出（失敗）劇以来、たびたび軍に輸送手段を提供し、帝国拡大（野蠻の文明化）に加担しつつ旅のオプション（擬似的に体験できる「奥地」や「源流」）を増やした。他方でこうした旅の簡便化は、逆に、苦難を伴うトラベルへの回帰志向をも生み出し、それが次章で論じられるレディ・トラベラーにつながる。三つ目には、世紀転換期にイギリス労働者にとって最大の息抜きとなったミュージック・ホールと、そこで涵養されたジンゴイズムのありかたを紹介している。全体として、帝国が、楽しい、わくわくするものとしてイギリスにもたらされた面を巧みに描いている。

第八章「女たちの帝国」は、氏が得意とするテーマだ。慢性的な女性余り状態にあったイギリスでは、ガヴァネスやチャリティ活動家という形で彼女達の受け入れが行われていたが、世紀半

ば以降、積極的な移民政策が推進され、カナダをはじめ、各地に女性たちが教師として、あるいは花嫁候補として出掛けていった。また、国内の貧困を解消する手段として移民を推進した者もいた。前著「女たちの大英帝国」（講談社現代新書、一九九八年）や『植民地経験のゆくえ』（人文書院、二〇〇四年）で詳述された女性ミツシヨナリの活躍や、植民地の奥方とブランク・ペリル論そしてメアリ・キングズリのようなレディ・トラベラーのエピソードが効果的に積み重ねられてゆく。最後に、ナイチンゲールの影に隠れていて最近まで忘れ去られていた黒人看護師メアリ・シーコルの事績が想起され、白人男性中心の帝国史から抜け落ちた、さまざまな女性の経験が織り成すもう一つの帝国史を立ち上げている。

第九章「準備された衰退」は、前章のメアリ・キングズリが、南アフリカ戦争中、ボーア人捕虜収容所で腸チフスに罹って死ぬところから始まる。メアリのパトロンの存在だったアリス・グリーンは、その死の真相を探るべく、自ら南アフリカに渡り、セントヘレナ島の捕虜収容所で、劣悪な環境に苦しむ捕虜たちの実態に触れる。野蠻なはずのボーア人は、文明の頂点に立つイギリス帝国の暴虐の被害者だった。アリスはボーア人と国なき民アイランド人人をバラレルにとらえる視線を獲得し、やがてアイルランド独立に関わってゆく。このスリリングな過程は『植民地経験のゆくえ』に詳しい。続いて、世紀転換期に登場したフリーガン問題を手がかりに、南アフリカ戦争とからんだ国民退化の恐怖と国民効率の掛け声、そして帝国を再生する一助としてのポイズカウト運動が紹介される。経済におけるドイツ、アメリカの猛追

と、南アフリカやアフガンでの苦戦、そして国民退化の恐怖にさいなまれていたイギリスは、勃興中の日本に注目した。こは、やや、とつてつけた感のある箇所ではある。一九〇二年には日英同盟が締結され、その後も日露戦争の際には、末松謙澄の講演活動などの効果もあつて、イギリスは親日であり続けたこと、そして、帝国の枠組みを窮屈に感じだした自治領は、関税改革運動を頓挫させると共に、第一次大戦後には日英同盟の破棄を促したことが描かれる。帝国はコモンウェルスへと転換してゆく。

第十章「帝国の遺産」は、現代の中東問題の起源となる、二〇世紀初頭のイギリス中東政策の顛末を、レディ・トラペラーから帝国唯一の女性将校に転じて「イラク建国の母」となったガートルード・ベルの生涯とからめて描いている。ベルが決定に関与した国境線がイラクを創ったわけだが、このイラクは王国から共和国にかわつた後、フセイン支配を経て、現在の混乱に至る。帝国の負の遺産は世界の肩に重くのしかかっている。このような帝国のアクチュアリティは、二〇世紀後半の国内状況を論じた最後の部分にも漂う。四八年以降にイギリスにやってきた西インド諸島からの移民は、一〇年後、ノッティングヒル暴動で白人の憎悪の標的となった。しかし、六五年から始まったノッティングヒル・カーニバルは徐々に受容されるようになり、今では誰もが楽しめる、マルチエスニックな社会を寿ぐイベントとなった。もちろん、ホワイトとブラックの差異化がなされなくなったわけではない。ステュアート・ホールに拠りながら、白／黒で二分しない、または、できない状況が生まれつつあることを指摘している。

最後に、「おわりに」では、昨今の「帝国」への高い関心につ

いて、イギリスにとつて、それはとりもなおさずアイデンティティの不安を示しているのだと氏は言う。ニール・ファーガソンのように、帝国を肯定する逆説でメディアの寵児となった人もいるが、氏はそういう大所高所に立つ文明論には懐疑的である。個々人の相異なる「経験」を地道につきあわせて共鳴させることを提唱して、氏は擱筆する。

本書が、井野瀬氏の多産な研究人生の一つの総決算であり、また、イギリス史と世界史への好奇心を満足させ、興味をかきたてる内容を持っている作品であることは、以上で分かってもらえたであろう。これほど多方面にわたる論点を纏め上げることのできるイギリス史研究者は、国内にはそういないのではないだろうか。西洋史離れ、本離れが言われて久しいが、本書はその趨勢に抗えるだけの力を備えていると思う。各章で興味深い史実をざっくりと切り分けて出してくれるこの歴史書は、読む快樂を教えて（思い出させて）くれる。

ただし、本書の魅力に脱帽する一方で、本評の読者はほとんどの場合、学究の徒であろうから、ここでは別の読み方も提示しなければならぬ。畢竟、すべての歴史書は膨大な史実を捨象した痕跡だ。井野瀬氏の物語からは見えてこない諸相を指摘することは、氏も待望する有意義な対話を生むだろう。問題を、いくつか挙げてみたい。

まず、右で本書を要約して気づいた点である。詰め込まれたエピソードの面白さは抜群である。しかし、メアリ・キングズリとアリス・グリーンのケースを除き、そこから導かれる知見は、通説的なものにとどまっているのではないだろうか。個人の経験を

語る箇所は生彩を放つが、そこから何か一般化した途端、「経験」の像が、既成の型に落とし込まれているように思われる。集団ではなく個人の「経験」の重層として歴史を描ききろうとする戦略の問題だろう。E・P・トムソンの「階級経験」という把握の仕方を批判した現在の方法論に乗る井野瀬氏にとつて、ここが苦しいところではないだろうか。たとえば、第一章、第二章でアイデンティティ・クライシスに悩む「イギリス人」とは誰を指すのか。アメリカ独立を支持し、フランス革命を喜び、パークではなくペインに共感し、イギリスの改革あるいは革命を夢見た無数の名もなきマルチエスニックな人々は、では何なのか。現代の「イギリス人」で、日々、ナシヨナルないしエスニックなアイデンティティが最大の関心事だという者は、移民や統治主体を別にすれば、一体どれくらいいるのだろうか（終章）。評者は、「現実」の反射としての個々の経験を問うことに加え、「現実」を特定の角度に反射させる、ある程度共有された鏡の型とその変遷を知ることが、より一般化された歴史像の構築には不可欠だと考えている。

これと関連するのだが、筆者のアイデンティティのカテゴリは、白人とそれ以外、男性と女性、そして「四ネイションズ」にほぼ限られている。総じてブリテン島内部の地域的多様性や階級への視線は弱い。「イギリス人」「アイデンティティの不安定さ」を際立たせるレトリックの必然として、「女」や「アイルランド人」といったカテゴリが相対的に本質化されている。また、アメリカ喪失以前には、「イギリス人」を結び合わせるアイデンティティがあったかのような前提も、「プロテスタント」だけでは

物足りない<sup>①</sup>。アイデンティティを本質化してはいけない、それはもつと可変的で多様なのだという掛け声で始まるアイデンティティ論の多くが陥る自己撞着だと思ふ。

帝国史の流れについても、若干の違和感を抱いた。第一章、第二章では、主に国制史的に帝国体制の転換が叙述されており、論理的な説明がなされるが、個別論をはさんだ後にくる第九章、第十章では、説明の仕方が変わり、もっぱら諸レベルのナシヨナリズムと帝国の相克として「衰退」が漠然と語られる。換言すれば、前者は国内史研究の延長として把握されるのに、後者はあくまで帝国史なのだ。一〇〇年のうちに論点が変わったといえるのかもしれないが、評者としては、アイルランド問題などを加味して、国制の「再」転換としてこの時代を描いて見せてほしかった。国内史にはそのような研究蓄積がある。

本書の魅力の一つ、劇的な筆致にも問題はあるだろう。登場人物たちは皆、強烈な経験をして、人生の道筋を変え、イギリスも度重なる諸「革命」で変容し続ける。そして、その触媒はつねに、最大音量で鳴り響く「帝国」のプレゼンスなのだ（一九六〇年代からは小さくない残響）。帝国史が国内史につきつける批判の多くは、帝国を考慮せずしてイギリス史は語れない、という命題に基づいている。もちろん、それを認めるにやぶさかではない。しかし、帝国の影響が看取されないところに、無理にそれを見出し、そうとすると、歪んだ像を提供することになるだろう。実はその危険性を、井野瀬氏は認識している。第六章の二二二頁で、一九世紀末まで労働者たちは帝国の存在と意味にほとんど関心を示さなかつた、と主張するバーナード・ポーターの研究に言及してい

るのだ。だが、それにもかかわらず、氏は彼に特段の反論をするわけではない。この根本的に重要かもしれない「無関心」の指摘を処理せず、放置しているのである。著名な帝国史家であるポーターの議論は、労働者のみならず、大多数のイギリス人にとつて、帝国は他人事、あるいはせいぜい数ある関心事の一つにすぎなかつたという、「大英帝国という経験」の外部の大きさを強調したものである（評者の実感とも合致する）。それならば、本書の第三章から第八章にわたつて強調される帝国の音がどこまで届いて経験されていたのか、歴史の劇的ならざる変わらない側面も含めて、冷静に再考する必要があると思われる。

帝国史から国内史に投げかけられる批判のもう一つは、国内史は視野が狭いというものだ。扱う地理的範囲を考えれば、それはたしかにそうだろう。しかし、イギリスから遠く離れた地域を取り上げたり、扱う地域を増やしたからと言つて自動的に有意な歴史が書けるわけではない（本書は面白い）。大切なのは、テーマの重要性なのだと思う（本書はこれもクリアしている）。それはさておき、ここで指摘しておきたいのは、本書を含め、帝国史の多くが国際的側面を軽視している点だ（国内史も同じだが）。原因は言語の壁だろう。研究にフルに使える外国語が英語だけ、という根深い問題が、多くのイギリス帝国史を拡大イギリス史にしていると思う。たとえば、ヨーロッパ——これもまたさまざまに「経験」されたはずである——の視点が入っていれば、「外人」のイギリス経験や、ヨーロッパ・アイデンティティの問題、あるいは、ヴィクトリア女王の王室外交などにも、相応の紙幅を割けたのではないか。

最後に、井野瀬氏が「帝国」を語りたがる「われわれ」と言つたとき（三六八頁）の「われわれ」とは誰かについて。ちなみに評者は、帝国に無関心ではないが、そこに入つてはいない。帝国関連書が氾濫する状況に浮き足立つ感覚はない。氏の問いかけはより限定して、ある一定の方向に語りたがる人間がある時期に増加するという現象にはどのような意味があるのか、としたほうが良いように思う。そうでなければ、評者の属する「われわれ」はいつも蚊帳の外に置かれてしまつたらうし、氏の属する「われわれ」も、答えは出せないだらうから。

以上、思うままに本書の魅力と問題点を挙げた。巻末の参考文献を見てつくづく感じるのは、日本人研究者たちによる翻訳紹介と先行研究の蓄積である。本書を可能にしているのは、日本の旺盛なイギリス研究意欲であらう。評者は本書を読み進むうちに、何人もの研究者の仕事を思い浮かべずにはいられなかつた。だからこそ、互いに異質なそうした諸研究をふんだんに吸収し、織り込んで、一枚の図柄を描けてしまふ井野瀬氏の筆力に、驚嘆の念を禁じえない。そして、ここに他の「帝国の物語」だけでなく、本評後半で一端を述べた国内史と外国史の知見をぶつけてゆけば、氏の「対話」は、より一層の実りを結ぶのではないか（こう書きつつ、氏がそのような試みを長く続けてこられたことを思い出し、また驚いてしまふのだが）。ここまで敢えて、安直に帝国史と国内史を分けて論じてきたが、実のところ、そのような決め付けを評者は自分に対してされたくないし、井野瀬氏もそうだろう。本書を読んで大きな刺激を受けた一歴史研究者からの筆者に対する応答として、この小文を受け取ってもらいたい。

- ① Emma Christopher, *Slave ship sailors and their captive cargoes, 1780-1807* (Cambridge, 2006).
- ② Peter Linebaugh & Marcus Rediker, *The many-headed hydra: sailors, slaves, commoners, and the hidden history of the revolutionary Atlantic* (Boston, 2000).
- ③ 拙稿「旧来腐敗の諷刺と暴露——一九世紀初頭における英国国制の

想像／創造——」(近藤和彦編『歴史的ヨーロッパの政治社会』(山川出版社、二〇〇八年、四四四―四七九頁)。

- ④ Linda Colley, *Captives: Britain, empire and the world 1600-1850* (London, 2002).
- ⑤ Bernard Porter, *The absent-minded imperialists: empire, society, and culture in Britain* (Oxford, 2004).

(四六判 三九八頁 二〇〇七年四月 講談社 税別三三〇円)  
(川村学園女子大学准教授)